

ユーラシアにおける境界と環境・社会 —学際的対話による包括的な「境界」知の獲得

ワークショップ参加者:

報告者8名(1名欠席)

アドバイザー(柳澤雅之先生)

傍聴者3名 計12名

WS以外の活動:

研究打ち合わせ(2014年12月6日、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)

日本中央アジア学会2014年度年次大会
公開パネル「変容する境域とモビリティ: 中央アジア乾燥地の人・モノ・社会」(WS後企画との位置づけ)(2015年3月29日、KKR江ノ島ニュー向洋)

ワークショップ開催日: **2015年2月7日(土) 奈良女子大学**

ワークショップで得られた知見:

- 冷戦の終焉、中国の改革開放、バングラデシュ独立など、大きな政治的なうねりによりユーラシア各地で境界の「透過性(permeability)」が高まったというユーラシア全域での傾向→「脱境界化(de-bordering)」
- 透過性の高まりによる境域社会や自然環境の変容(デッドエンドがフロンティアに; 境域間コミュニケーションの変質→境界(国境)の内側に留まっていたものが外に浸潤してゆく)
- 環境問題や災害が、他の政治的・社会的コンテキストと共に境界の意味変容(透過性向上/低下)をもたらした事例もある
- 境域そのものも「流動性」→主権国家の政府を頂点とする入れ子型の構造だけでは捉えることのできない、主体性をもった空間のあり方; 気候や地形といった自然地理的なファクターが政治・社会に及ぼす影響→スケールの「ずれ」; スケール間の政治への新たなアプローチの可能性→従来型の国際関係論などのディシプリンでは捉えられない、スケールのあり方の発見
- ボトムアップで境域の場所のロジックに立脚しつつ、境界や境域の通時的な変容を、政治・社会的な文脈だけでなく、自然環境というファクターを考慮に入れながら考察する必要があるという研究アプローチの共有(→グローバルに比較検証可能な新たな地域研究の可能性)

今後も、『地域研究』誌での特集組織など共同研究を継続します

